

〔一もと草〕新酒

糟丘亭

よしあしの難波の浦には、神無月の頃に、ゐざけ下さんと、舟もよひして、名にしあふ伊丹西の宮、
 なだめ、大坂でんぼう、兵庫など、その外のも問丸にあつめて、一番舟十あまり四艘に、番舟もおな
 じほど積そろへつゝ、いつの日いつの時などさだめて、ひかへ綱きりてはなてば、思ひくゝにぞ
 海原を風にまかするなれ、このよしはやうこゝにつたふれば、新川新堀に家居せる問屋のむか
 しは八十あまり四軒となん聞しを、いかなるにか今は四十あまり六家とや、その家この賣場と
 いへるに、かのくだれる數の舟主の名を壁にしるして、誰々はよくのる、たれ舟はいつもたのま
 れず、又今年なにかしは新造のるなど云ふめるころは、ふる酒もかれくゝなれば、家々つどひて、
 細き枯木をけづりて、きゝ酒の釘なん用意するとぞ、これにかゝづらふをのこともは、しぶ染と
 かやいへるあらしきひとへに、小倉といへる帶して、太神樂といへる獅子の春中みるやうなる、前
 垂てふものかけて、やゝともすれば、藏前川岸前に集りて、樽石など持くらべて誇りあへるにこ
 そ、時雨もはれやかに、小春の天暖かなれば、この夜さりや曉など、まつ頃かの舟どものはやき
 は品川の沖にこそつくめ、いかりもまだおろしあへざるに、天満とかいへる舟して、とく大川
 端なるこゝの問丸に案内したるこそ、一番船とは定りて、舟のりもめいほくあれば、くる年中も
 この舟のさちにぞなれる、さは沖には早う付ても、この案内におくれければ、二番三番ともいは
 れて本意なし、荷物受るにも通請支配請問屋など、いづれとくだくしければ、もらしつ問丸は
 大茶船といへる、しるしたて、荷わけにぞゆくなる、問屋のあるじは、初相場立るとて、例のどこ
 ろにぞあつまるなれ、荷分せし舟の乗り入るほどこそ、いとゞ小川のところせきに、あゆみ板打
 渡して、まろばしあけるも、いみじくしつけたるは、やすげなれ、藏々に入るほど、とくゎへ積送る
 など、いそぎあへるもをかし、青き旗たてたるは、八百あまり八町はさらなり、しるしの杉かざせ